

ギリシア古典の自然科学書の翻訳 --- テオプラストス『植物誌』について ---

小川 洋子

序⁽¹⁾

「植物学の祖」といわれるテオプラストスは古代ギリシアの哲学者で⁽²⁾、紀元前 285 年ころ、85 歳で没したと伝えられる。『植物誌』（全 9 巻）はその主著である。筆者は 2008 年、京都大学学術出版会の西洋古典叢書に、最初の 3 巻を収めた訳書『テオプラストス 植物誌』を上梓した。翻訳に当たって常に考えさせられたのは、古代の学問の水準をいかに正しく伝えるかということだった。この書物の科学書としての現代的意義も、それによるからである。また、西洋史専攻の筆者にとって、歴史資料としての古典を解釈する場合は一味違うさまざまな問題に出会うことになった。『植物誌』の内容は単に植物学の範疇にとどまらない。現在に比べて資源としてより重要だった植物を無駄なく利用するための経験とそのための調査・研究を集大成したものでもある。つまり、ヨーロッパの農学、林学、本草学などの原点ともいえる研究だといえる。したがって、テキストを読み解くには、植物学だけでなく、農林学を習得し、現代の水準に照らして、古代の学問水準を読み取っていく必要があった。特に難渋したのが、植物名と植物に関わる用語の表記である。テキストの用語が意味することを正確に捉えて、翻訳するためには、植物学用語を一つずつ慎重に選ばねばならなかった。訳し方によって当時の知識、理論を誤って伝えることになりかねないからである。ここでは、植物研究の総論的な部分である第一分冊で遭遇した問題を中心に、古典科学書の用語選定にかかわる問題を、具体例を挙げて、論じることにする。

I テオプラストス『植物誌』の翻訳の背景

1. ヨーロッパ最初の植物学書としての『植物誌』

テオプラストスはアリストテレスの研究上の同僚であり、その学派の後継者として、前 323 年から没年まで、アリストテレスの建てた学校、リュケイオンの第二代の学頭を務めた。『植物誌』は、ここでの講義録とされる⁽³⁾。

古代ギリシア哲学には自然哲学の伝統があり、アリストテレスとテオプラストスが小アジアのアッソスで生物に関する共同研究を始めたのが、ヨーロッパにおける生物学の始まりとされる⁽⁴⁾。両者は、

小アジアの町、アッソスやレスボス島で生物の実証的な研究に没頭し⁽⁵⁾、アリストテレスは『動物誌』、『動物部分論』、『動物発生論』などの歴史に残る優れた動物学書を著した。552種の動物について、観察や実験を重視する経験的・実証的研究をおこなっている。この動物研究はアリストテレスの哲学に重要な意味を持つとされる。一方、テオプラストスが著したのが、500余種の植物を研究した『植物誌』9巻と『植物原因論』6巻である⁽⁶⁾。この『植物誌』は近代以前の最高水準の植物学研究とされる⁽⁷⁾。

テオプラストスの著作と伝えられる226のうち(DL 5.2.42-51)、現存するものは極めて少ない。幸いにも『植物誌』と『植物原因論』は完全な形で伝えられている。しかし他には『人さまざま』や、『形而上学』⁽⁸⁾、小品、断片などが残されているにすぎない。『植物誌』はテオプラストスの没後まもなく、弟子たちが8巻だった『植物誌』に、以前の著作『液汁について』と『根の効力について』の二書を1巻にまとめて加え、9巻本としたものである。古典に引用される巻数のずれなどから、巻数やその構成が長く問題とされてきたが、1990年代になって、上述の見解に落ち着いた⁽⁹⁾。

2. 自然科学書としての『植物誌』と研究動向

わが国では、ギリシア古典のうち、哲学、歴史、文学の分野に比して、自然科学書の翻訳が少なかった⁽¹⁰⁾。アリストテレスの動物学書は、1969年、動物学者の島崎三郎氏が20年かけて翻訳したのが本邦初訳で、専門的な註が施されている⁽¹¹⁾。その刊行にあたって、島崎氏は「ここで私が投げ出したら、おそらくもうこんなものを訳す人は当分日本に出ないだろうと思う。ギリシア語の読解力とか、生物学史の理解をいうのではなくて、こんな途方もない本を忙しい日常の時間を割いてまで読むような暇な人は出ないだろう、ということである」と書いている⁽¹²⁾。島崎氏の言葉通り、その後、動物学書の翻訳が再び世に出たのは、2005年のことである⁽¹³⁾。

『植物誌』は1988年に初めて邦訳が刊行された⁽¹⁴⁾。同年、筆者もロウブ版に基づき翻訳を完了していたが、内容の疑問を埋める文献、資料がなく、進展させられない状態だった。当時は、19世紀の校訂本と⁽¹⁵⁾、それをほぼ踏襲したホートによる英訳つきの校訂本(1916年刊のロウブ古典叢書版)しかなく⁽¹⁶⁾、欧米でも、テオプラストスについてはアリストテレスに関する研究書の中で付随的に論じられるにすぎなかった。また、地中海の植物に詳しい図鑑類も入手できなかった。ところが、1976年ロウブ古典叢書の『植物原因論』第1巻(第2、3巻は1990年)の刊行に続き⁽¹⁷⁾、1980年代後半以降、俄かにテオプラストスの研究が盛んになった。例えば、『植物原因論』⁽¹⁸⁾のアイナソンによる訳註はホートの註より詳しく、『植物誌』の引用箇所が多い。また、『植物誌』の引用、借用箇所が多いプリニウス『博物誌』⁽¹⁹⁾ビュデ版の訳者でもあるアンドレによる植物名辞典も刊行された⁽²⁰⁾。

テオプラストスに関する研究書の刊行も相次いだ⁽²¹⁾。1992年には、テオプラストスの言説を網羅的に集めた資料集全2巻が刊行され、その註釈シリーズ(全9巻予定)も刊行中である⁽²²⁾。これとともに上述の資料集の編集メンバーを中心とするテオプラストス・プロジェクトがヨーロッパで発足し、2年ごとに開かれた研究会の成果が順次出版された。学術誌に掲載される論文の増加とあいまって、研究はかつてない活況を呈することになった⁽²³⁾。2006年に、アミグが『植物誌』ビュデ版全5巻の

刊行を終えた。また、アミグの 36 の論文を収録した大論文集 (2002 年) が出されるなど⁽²⁴⁾、新しい研究が続いている⁽²⁵⁾。

3. 写本と校訂本

現在の『植物誌』9 巻本の元になるものが編まれたのは前 1 世紀のことである。現存する最古の、最も重要な写本、ヴァチカン図書館所蔵の写本 (10 巻本。U 写本) など全部で 10 の写本と断片がある。1976 年、アイナソンが『植物誌』、『植物原因論』の写本の系統図を作成し⁽²⁶⁾、U 写本は 15 世紀のものとしたが、1988 年、アミグは、字体から、9 世紀末から 10 世紀のものであるとした⁽²⁷⁾。15 世紀に、最初の印刷本であるアルドゥス版 (1495-8 年)、ガザによるラテン語訳が出た後、16 世紀から多くの校訂本が出された。それらの成果をシュナイダーが集大成したが (1818 - 1821 年)⁽²⁸⁾、現在入手できる校訂本は 3 種だけである。

第 1 の校訂本はヴィンマーによるもので⁽²⁹⁾、シュナイダーが間接的にしか知らなかった U 写本に基づく『植物誌』、『植物原因論』などを収めたものである。これが基本的なテキストとなり、現在使用されている巻、章、節はこれによる。植物索引、ラテン語訳があり便利だが、ラテン語訳は難解な箇所ほど、言葉を置き換えただけの場合も多い。なお、筆者はヴィンマーのディドー版 (京大所蔵) を参照した。

第 2 の校訂本は、1916 年のホートによる英訳と簡略な註釈を付したものである⁽³⁰⁾。その校訂はほとんどヴィンマーを踏襲したもので、省略の多いテオプラストスの文体を英訳で補足しているが、問題となる点が多い⁽³¹⁾。しかし、その後、70 年余、新しい校訂本、訳註書が出なかったために、唯一の現代語訳として研究書に引用されてきた。また、同定された植物名が古典ギリシア語のもっとも権威あるオックスフォードの希英大辞典 (LSJ) に採用されたために、大きな影響を及ぼしてきた。ところが、近年、その同定の間違いは、多くの研究者が指摘するところとなり、アミグやレイヴンも酷評している⁽³²⁾。

第 3 の校訂本は、最新のもので、ビュデ版の古典叢書として出された仏語対訳、校訂、註釈、解説、索引を含む 5 巻本である (1988 - 2006 年)⁽³³⁾。これは、モンペリエ大学教授 (現在、名誉教授) スザンヌ・アミグ女史によるもので、第 1 巻刊行から 18 年かけた労作である。また、専門の古典学や文献学の学識を傾注したというだけでなく、植物学者とともにフィールドワークを重ねて、植物を観察した成果を加えたものである。新しい校訂は、将来、「決定的な校訂」になるとされており⁽³⁴⁾、新解釈を施した翻訳や本文の何倍にもなる詳細な註釈への評価も高い。筆者が底本としたのはこれである。

植物の同定と植物学用語

1. 古典に見られる植物の同定

『植物誌』には 500 余種の植物が出てくる。古典とされる植物研究書を翻訳する際には、その植物名を正しく同定することは最重要課題である。植物名を決めるにあたっては、まず、古代の植物が現

在のギリシアにある植物と同一か否か、次に、現在の植物のどれに該当するか、最後に、同定された植物の学名を和名でどう表記するか、という問題がある。

第1の問題は、古代の気候と現在の気候が同一だったか否かという問題だが、古代史家の間では、紀元前5-4世紀頃のギリシアの気候は、現在とほぼ同一であったという見方で一致している。テオプラストスの時代、前300年頃の平均気温は現代と差がなかったという⁽³⁵⁾。年による変動が大きく、飢饉をもたらすこともあったが、長期的な気候変動はなかったとされるので、基本的には植生は類似していると思われる。一方、古代には確実に存在したと考えられるのに、現在のギリシアには分布しないもの（コルクガシ）もあり⁽³⁶⁾、現在と全く同一だったわけではない。また、人為的な影響も無視できない。放牧や山林火災が植生に影響を与えた可能性があり、栽培植物などには帰化したものが多数見られ、交雑があった可能性も高い⁽³⁷⁾。それらを考慮すれば、現在分布する植物と大差ないとみてよさそうである。

第2に、『植物誌』の植物が、現代のどの植物に当たるかについては、19世紀以来の同定を再検討したのが、アミグの同定である。学名は分類基準が変わると、改変されるので、ホートが同定した植物と同一でも、90年以上後の現在ではその学名が変わっている場合もある。この場合は註あるいは索引で以前の学名を挙げておくことで処理できるが、ホートの索引の同定には問題が多い。ホートの同定は、当時のロンドンのキューガーデン園長だったシスルトン・ダイアーによるものだが、これに対しては、近年批判的な意見が多い。レイヴンは1970年の講演で、ダイアーが参照した古典文献数が少なく、同定の証拠資料が不十分であるにも拘らず、「半世紀以上もその同定が磐石の支配をしていることには、義憤に駆られる」と痛烈に批判した。さらに、「学生や研究者がこれに従ったために間違いを犯している。この同定は疑ってかかれ」と酷評している⁽³⁸⁾。その後、アミグも、ホート索引は軽率で、明らかに間違っているのにLSJに採用された結果、「この辞書の権威のために長命を保障されたのは遺憾である」とまでいっている⁽³⁹⁾。これに対して、アミグの同定は現在最高のものとの評価を得ているので⁽⁴⁰⁾、同定はこれによることにした。

アミグの同定によったのは自然観察の点でも、文献参照の点でも、筆者にはとてもアミグを越える作業は不可能だからでもある。それは以下の二つの理由による。第1に、日本と地中海地方の植物相が全く異なっているため、日本にいては地中海地方の植物を容易に見ることができない。年降水量を比較すると、ギリシアでは、平地で日本の約三分の一、山地でさえ半分程度で極めて乾燥している。冬に北西から吹く風が降雨をもたらすために、アテナイなど、風がさえぎられる東側では乾燥が著しく⁽⁴¹⁾、年降水量が400ミリメートル以下である。降水量が多いギリシア北西部でも約1500ミリにすぎない⁽⁴²⁾。植物の生育限界が250 - 300ミリメートルだから、植物にとっては厳しい生育環境であることが分かる。したがって湿潤な日本では、地中海性の樹木は、薬用植物園などで多少見られる以外、ほとんど観察できない。例えば、ナッツとして食べられるピスタチオの仲間のテレピンノキ *Pistacia terebinthus* や、赤い染料がとれるので、合成染料が出るまでは重要だった虫こぶを形成するアカミガシ *Quercus coccifera* は、地中海周辺の固有種で⁽⁴³⁾、テキストに頻出するが、ギリシアでしか見られなかった。

第2の理由は、広範にわたる植物を調べる文献、図鑑が入手しにくいことである。『植物誌』にはギリシアだけでなく、アレクサンドロスの東方遠征によって広がったヘレニズム世界全域から集められた情報が含まれている。したがって、各地の植物誌⁽⁴⁴⁾や図鑑を参照しなければならない。例えば、テキストに記載された特徴を正しく訳すためには、多くの図鑑を駆使して、アミグが同定した植物を確認し、比較検討しなければならなかった。ところが、欧米の植物図鑑類は、西欧や米大陸中心のものが多く、1985年以降に出された大型の図鑑類でさえ、地中海地方の植物の記載は少ない。そこで、ギリシアの図鑑を参照することが不可欠になる。幸い、1980年代以降、ギリシアでも種々の図鑑が出版され、ことに、2006年以降多数刊行されて豊富な情報が得られるようになった⁽⁴⁵⁾。

ところが、ギリシアの図鑑には英語版もあるが、現代ギリシア語のものを使う場合は、言語上の問題がある。独立戦争以降の言葉を指す現代ギリシア語が古代語とはかなり異なっているからである。ギリシアでは、ローマ支配に続き、スラブ人の侵入、ヴァイキングやヴェネツィア人など、ヨーロッパ諸民族の侵入を受け続け、トルコに征服された間に、民衆の使う言語が大きく変化した。独立を目指す中で、口語だった民衆語（ディモティキ）から外来語や俗語を除き、擬古典的な純正語（カサレヴサ）が人工的に作られ、1830年の独立後は公用語となった。これが教会や司法の場で、また新聞や書籍にも使われていたが、現在は、民衆語が公用語となって統一が進んでいる。現代ギリシア語は、古典語に比べ文法は簡略になっているが、発音がかなり違う。基本的な用語でさえ綴りの違うものがある。幸い図鑑の記載は洋の東西を問わず、定式化されているので、現代ギリシア語の図鑑でも辞書さえあれば、十分間に合い、貴重な情報を得ることができた。

このような理由から、アミグによる植物の同定に従うこととし、図鑑類に見られるそれらの植物についての記載を参考にして、テキストの翻訳を進めることにした。

2. 植物名の和名表記をめぐる問題

もう一つの重要な問題は、植物名の日本語表記である。わが国でも、1980年代以降刊行された朝日百科『植物の世界』や北隆館の植物図鑑シリーズなどには、外国種が比較的多く掲載されているので、同定された植物の和名については基本的にはこれらによることにした。しかし表記については、日本ならではの問題に遭遇することとなった。わが国では、明治以降、欧米など気候的に類似した温帯の植物が導入され、多くの帰化植物に和名がつけられているが、地中海地方の植物は和名がつけられるほど、広く栽培されていないので、和名が定まっていないものが多い。そのため、翻訳に当たってとった対処方法をいくつかの例を挙げて紹介する。

a. 和名がないギリシア地方の固有種の場合

西・北欧などに分布する近縁種には和名が定着しているが、ギリシアの固有種には和名がない場合がある。例えば、リンゴは明治時代にヨーロッパから入ったものだから、わざわざセイヨウリンゴという必要はない。しかし、例えば、モミの場合、ギリシアでは、北部などに分布する *Abies alba* には、ヨーロッパモミという和名があるが、それより多く分布するギリシア固有種、*Abies cephalonica*

には和名がない。英名を ‘greek fir’ といい、「ギリシヤモミ」とする訳書もあるが、この名称は普及していない。また、地中海地方固有のイチゴに似た液果がつく二種の低木のうち、「コマロス」*Arbutus unedo* にはイチゴノキ (英名 ‘strawberry tree’) という和名がついているが、これによく似た「アンドラクネー」*Arbutus andrachne* には和名がない⁽⁴⁶⁾。その英名は ‘Greek strawberry tree’ なので、「ギリシヤ [種の] イチゴノキ」、とでもすれば分かりやすいが、勝手に和名をつけるわけにはいかないという悩みがある。これは、全ギリシヤによく分布し、テキストにも頻出する木だが、やむなく括弧に入れて原音表記することにした。英名には Greek ~ など、地名がついているものはその他にも多く、バルカン半島の固有種の *Juniperus excelsa* は英名 ‘Greek juniper’ で、「ギリシヤネズ」と書けば通りやすいが、それも安易に許されないもどかしさがある。なお、植物研究の書物では植物名をカタカナ表記するという慣例があるので、和名のないものはカタカナで原音を記し、「」括弧で括って和名と区別した。さらに本文中の [] 括弧内に種類を示すか、註で補うなどの方法で対処した。

b. 慣用される和名に疑問がある場合 — 「ドリユース (オーク類)」

ブナ科コナラ属にあたる「ドリユース」*Quercus* は頻出する樹木だが、慣用される和名に問題がある。この山中に聳え立つ大木はゼウスの聖木とされ、ドドナではその葉のそよぐ音で信託を下したと伝えられるほどだから、他の古典にもたびたび現れる。それらは、従来ほとんどの場合「櫪かしの木」と訳されてきた。稀に「櫪かしわ」と訳され、原音表記される場合もある⁽⁴⁷⁾。『植物誌』では、この「ドリユース」には、「オーク類」という訳語を当てたが、それにはかなり難しい問題がある⁽⁴⁸⁾。

まず、テオプラストスが用いた植物名は、多くの場合、種名というより、今日の「属」に近い植物群を指しており、「ドリユース」もコナラ (*Quercus*) 属諸種の総称として用いられている⁽⁴⁹⁾。ところが、コナラ属にはカシ類とナラ類という分類群があり、「櫪かしの木」か「櫪かしわ」か、という問題がでてくる。ところが、専門家の間でも両者の間に明確な線を引くのは難しいようである⁽⁵⁰⁾。

わが国で「カシ類」と呼ばれるのは、『林業百科大事典』によれば、「常緑樹で、葉が革質、その堅果を包む殻斗の総苞の鱗片が癒合して数層の輪状 (同心円状の模様) のものをいい、主として東アジアから東南アジアの暖帯に分布する。日本のアラカシ、シラガシなどアカガシ亜属 (Subgen. *Cyclobalanopsis*) のものがこれである」とされる。一方、「ナラ類」と呼ばれるのは、コナラ亜属 (Subgen. *Lepidobalanus* = Subgen. *Quercus*) で、「北半球の温帯から熱帯の高地に分布し、常緑樹種と落葉樹種を含み、殻斗はとげ状や鱗片状で、それが押しつぶされた形のもの、鱗片が長く反り返る種とがある。日本のミズナラやカシワがこれに含まれる」という⁽⁵¹⁾。

ところが、北西ヨーロッパには、明らかに常緑カシ類は分布せず、わが国でいう「カシ」は存在しない。すなわち、英語の ‘oak’ (及び、仏語の ‘chêne’ や独語の ‘Eiche’) は、日本でいう「カシ」にはあたらぬ。英語の oak は、現在はコナラ属全体の名称として使われているが、本来は、イギリスに分布するコナラ属の二種、*Quercus robur* (ヨーロッパナラ) と *Q. petraea* を指す名称だった。前者はヨーロッパに一般的な種で、英名を ‘Common oak’ (‘English oak’) という。そのため、

わが国でヨーロッパのコナラ属に言及する際は、一般的に、近縁種を含めて落葉性のナラ類を「オーク」と呼んでいる。例えば、「オークは森の王者」、「オークは森の王、ブナは森の母」などという場合の使い方である⁽⁵²⁾。

ギリシアにも落葉性コナラ属の諸種が分布しており、『植物誌』では、「ドリユース」と総称されている⁽⁵³⁾。この中には、ギリシア北部に分布するヨーロッパナラ *Quercus robur* を含め、多くの落葉性コナラ属諸種が含まれている。外見は日本のミズナラやコナラに似た種である。イギリスの落葉性コナラ属の総称である ‘oak’ と同様の意味を持つ語だと考えられる。そこで、「ドリユース」と呼ばれた植物群の訳語としては「オーク類」がふさわしいと考えた。

この落葉性コナラ属の「ドリユース」には、修飾語をつけて「～のドリユース」という形で、多くの種類が記載されている。そのような呼称があったことから、「ドリユース」と呼ばれる樹木の中に、多数の植物群を見分けていたことは確かである⁽⁵⁴⁾。なお、落葉性樹種にも、例外的に固有の名を持つ木がある「アイギロプス」(HP 3.8.2, 4, 6) は、*Quercus pedunculiflora* とヨーロッパナラとの落葉性の二種に当たる。前者は、葉が *Quercus petraea* によく似た種で、バルカン半島では、ヨーロッパナラに代わって分布する種だから、全ギリシアで見られる⁽⁵⁵⁾。これは広汎に生育したせいでよく知られていたために、他のオーク類と区別して、独自の名称がつけられたのかもしれない。

一方、南欧には常緑のコナラ属も分布する。ギリシアには「ブリーノス」(*Q. coccifera*) や「ペロス」(*Q. suber*) などがある (HP 3.16.1-3)。^{『植物誌』}では、これらと「ドリユース」との類似点を認めながらも、「ドリユース」と区別している。堅果も、「ドリユース」の堅果「バラノス」(*Q. ilex*) と区別して、「アキュロス」と呼んでいた (HP 3.16.3)。これらは硬い、棘のある葉を持つ常緑樹で⁽⁵⁶⁾、深裂葉のヨーロッパナラの類とは明らかに異なる。その他にも、「アリアー」(*Q. ilex*) や、「ペーゴス」(*Q. aegilops*、とくに *Q. macrolepis*、および *Q. macedonica* = *Q. trojana*) などが固有の名を持つ種で、卵形の葉の縁が鋭く尖ったヒイラギのような葉を持つ。「アリアー」は常緑性で、「ペーゴス」は新しい葉が出るまで葉が落ちず、常緑に近い⁽⁵⁷⁾。セイヨウヒイラギカシは地中海沿岸の硬葉樹からなる自然林の主要な樹種とされる。もっとも、伐採、火入れ、放牧などのため、ギリシアには自然林はほとんど見られなくなり、それに代わって二次林の常緑低木林 (硬葉マキ) に混在するのが、アカミガシなのだという⁽⁵⁸⁾。これはきわめてありふれた樹種で、ヤギが若葉を食べないところでは大木になって何百年も生き残るといわれている⁽⁵⁹⁾。実際、住宅地近くの空き地では藪状のアカミガシを、遺跡の空き地では小高木状のものを見たことがある。しかし、ヨーロッパのコナラ属は落葉種も常緑種もすべてコナラ亜属に分類されるから⁽⁶⁰⁾、上述の常緑性諸種もコナラ亜属である。コナラ属の常緑種 (ウバメガシ以外の) を「カシ」とする見方は日本では成り立つが、ヨーロッパにはあてはまらない。

また、アルカディア地方の樹木「ペロドリユース」(HP 1.9.3, 3.3.3, 3.16.3) はギリシア人の「ドリユース」観を知る上で注目される。これは、常緑樹のコルクガシにあたる「ペロス」⁽⁶¹⁾ と「ドリユース」との合成語で、コルクガシのことだろうとアミグはいう⁽⁶¹⁾。この木は、

ドリス地方では「アリア'´」（アテナイでは常緑のセイヨウヒイラギカシのこと）と呼ばれたという。また、「ペロドリュース」は「ドリュース」とアカミガシの両種に類似するが、葉の大小や木質、材の色などが、「ドリュース」とアカミガシの間の特徴を示すと記されている（HP 3.16.3）。因みに、コルクガシはコナラ属コナラ亜属に属し、日本のウバメガシに似るとされる。ウバメガシもコナラ亜属だが、ナラ類とカシ類の特徴を併せ持つ。そのため両者はカシ類とされることもあるほどである⁽⁶²⁾。古代ギリシア人は、常緑性のアカミガシと落葉性の「ドリュース」が両端に位置し、その中間に両者の中間的な特徴を持つ「ペロドリュース」が位置するような樹木群としてコナラ亜属の諸種を理解していたと考えられる。

上述の通り、テオプラストスは、コナラ属を総称して、「ドリュース」を用いたが（HP 3.6.8）、特に、その落葉性樹種を指示するのに用いる場合もあった。葉の特徴や堅果の形など形態学的な観点から、コナラ属の常緑性樹種と区別していたのである（HP 3.16.1-3）。しかし、当時のギリシアのコナラ属の諸種はすべてがコナラ亜属に分類される種だった。したがって、ヨーロッパのコナラ属の樹種では「カシ」のつく和名を持つ常緑種でも、日本に分布するアカミガシ亜属をいう「カシ類」にはあたらないのである。勿論、落葉種は「カシ」ではない。よって、日本語に訳すなら「カシ」は適切ではなく、落葉性コナラ亜属を指す「ナラ」と訳すほうが正確である⁽⁶³⁾。しかし、日本語の「ナラ」には落葉種の印象が強く、コナラ属の総称としての「ドリュース」にはなじまない。そこで、ヨーロッパのコナラ属の落葉性樹種の名称だったが、コナラ属の総称として用いられている「オーク」（種類が多いとされるのを考慮して「オーク類」）が訳語としては、より相応しい、と現在の時点ではいえそうである。もっとも、コナラ属は多種多様で分類が難しく、分類は変化していくものだから、断定が難しい。このような問題がオークに限らないところに、同定や和名での翻訳の難しさがある。

c. 和名が一般に普及していない場合

—「パリエーロス」はセイヨウハマナツメかキリストノイバラか—

「パリエーロス'´ S」は地中海地方に分布するハマナツメ属の固有種、*Paliurus spina-christi* にあたり、これはことにバルカン半島に多いので、『植物誌』に頻出する種だが、和名が混乱している。キリストが十字架にかけられた時かぶらされたというイバラの冠を編んだ植物として有力視され、英名は‘Christ thorn’で、和名をセイヨウハマナツメ⁽⁶⁴⁾や、キリストノイバラ、トゲハマナツメともいう⁽⁶⁵⁾。これは丈が高くならず、枝はたわみやすく、葉の付け根に大小二つの極めて硬い刺があるので、イバラの冠とするのに相応しい。ただし、イスラエルの各地（ヤッファ、ガリラヤのラマ、ナザレトなど）には見られるのに、ユダヤ地方には現在分布しないという弱点がある。一方、キリストノイバラはクロウメモドキ科ナツメ属の *Zizyphus spina-christi* だという説もある。これは十数メートルにもなる高木で、枝を取りにくいという欠点があり、若い枝がしなやかな *Paliurus spina-christi* のほうに分がありそうである⁽⁶⁶⁾。

ところが、キリストノイバラという和名は、*P. spina-christi* と *Zizyphus spina-christi* の双方の和名に使われていてまぎらわしい⁽⁶⁷⁾。したがって *Paliurus spina-christi* にはセイヨウハマナツメと

いう名称がふさわしいが、いくつもの和名があって、定着していない⁽⁶⁸⁾。そのため、*Paliurus* (ハマツメ) 属の属名にもなっている原音の「パリウーロス」を用いた。

以上のように、可能な限り和名表記を心がけたが、和名が定着していないものについては、本文中に原音で示し、和名や種類を示す[]の類]を補った。また、当該植物に和名がなく、その属の植物が一種しか出てこない場合には、本文では属名を用い、その旨を註に記した。多くの樹種が列挙される場合、原音名を羅列したのでは、例示された意味が伝わらないと考えたからである。

3. 科学用語の適用について

a. アリストテレスの用語の借用

自然科学書である限り、現代の科学の専門用語をどの程度訳語として用いることが許されるかという問題がある。また、『植物誌』はアリストテレスの『動物誌』を範として書かれたため⁽⁶⁹⁾、アリストテレスの用語を借用したことが多い。アリストテレスの用語については専門的な訳語が普及しているため、それらを『植物誌』の訳語としてどの程度用いるかという問題もある。

例えば、テオプラストスはアリストテレスの研究法を意識して、多くの用語を借用している (HP 1.1.1)。そのような場合には、動物の間に相違を生じさせるとされた「性状 (パトス σ)」「性格 (σ エートス)」「生活法 (ピオス σ)」など (HA 487a10-12) のように、その慣用的な訳語を用いることにした。また、アリストテレスは分類の基本的な用語として、「ゲノス (類)」や「エイドス (種)」を用い、独特の意味を認めている場合がある⁽⁷⁰⁾。当時は物事は分類することによって認識できると考えられたから⁽⁷¹⁾、『植物誌』でも冒頭で、植物の分類がなされており、「ゲノス」と「エイドス」は全編に頻出する。しかし、テオプラストスは必ずしもアリストテレスの用法に固執したわけではない⁽⁷²⁾。そのような箇所は、相応しい用語を用いることにした。

また、生物の構成要素としての「部分 (メロス μ σ)」についても、当時植物の部分としての名称がなかった場合は、それに対応する動物の器官の名称をそのまま借用することが明記されている (HP 1.2.3, 5)。例えば、養分が通る道と考えられた葉脈や、導管などの維管束の場合、動物の部分である「 σ プレベス (「血管」の意)」を借用している (HP 1.1.11)。しかし、植物の部分の名称としては「血管」はなじまない。そこで、アリストテレスの用法を見ると、アリストテレスは「血液 (ハイマ ρ μ)」や「血清 (イコール σ)」を流動性のものみなし (PA 647b10-17)、「イコール」は「血液の水質部分」だということから (HP 651a17)、両者は血管を流動するものとみなされている。しかも、血清やリンパ液を含めて「イコール」といったらしい。とすれば、「プレベス」は血管とリンパ系を指す脈管系 (=循環系) にあたるともいえる⁽⁷³⁾。植物についても葉の維管束を脈という。とすると、「プレベス」の訳語には脈管が相応しいと思われる。

また、植物の「髄」や、「髄の周辺部分」、「木材の心材」を含む名称として、テオプラストスは「子宮」を意味する「メートラー μ σ 」を用いている。ところが、「メートラー」を「髄」の意味で用いた例はテオプラストス以前にはない。そこで、テオプラストスはまだ木化しない柔らかい柔組織である「髄」を生命活動の中心とみなして、動物の「子宮」を宛てたのだとグリーンはいう⁽⁷⁴⁾。た

だし、「髓」の別称として「*καρδία*」（「心臓」の意）や、「*μυελος*」（「骨髓、髓」の意）をあげていることから、当時、髓の存在が知られていたのは明らかである（HP 1.2.6）。つまり動物の髓に対応するものと考えられていたと思わせるので、「髓」と訳した。

以上の通り、アリストテレスから借用した用語については、慣用的な訳語に配慮しながらも、植物に関わる用語として違和感のないものを用いるべきかと思われる。

b. 古代には理解されなかった事象や概念の表記

テオプラストスは植物と動物は完全に対応しないと考え、植物学の研究法を模索した。その結果、植物の研究には独自の手法が必要だと主張し（HP 1.1.4-5）、用語にも日常語を用いて語ろうとしたように思える節がある。『植物誌』が植物に関する初めての学術的研究成果だったとすれば、それ以前に専門用語はなかったはずである。そこでテオプラストスは事実を的確に伝えるための手段として、多くの日常語に独特の色付けをして、事象や概念を表そうとしたらしい。それらは日常語の語感を重んじて訳すことにした。そのような例を挙げてみよう。

第1巻冒頭には、「動物の場合に、一度できたら永続きするものを「部分」とする、という定義は、植物にはあてはまらないので、植物の『部分』の定義は難しい」という。花や葉、実、「ブリュオン」などは重要な構成要素であるにもかかわらず、1年しかついていないものもあるからだという（HP 1.1.2）。また、木が毎年作りだすもの [部分] として、「葉、花、実、芽とともに、『ブリュオン』、…セイヨウハシバミの『イウーロス』、アカミガシの『ココス』」などをあげる（HP 3.7.3）。これはテオプラストスがその実態を正確に把握していなかったため、それが指示するものに対して現代用語でなく、本来の意味に基づく訳語を用いるべき例かと思われる。

「ブリュオン（こけのような房）」

「ブリュオン」は、オーク類の垂れ下がった雄花の集合体、すなわち尾状花序（HP 3.3.8）やゲッケイジュの花房（HP 3.7.3）、ゲッケイジュの花房とトネリコ類の花房（HP 3.11.4）などを指すのに用いられた。ホートは一般的には「尾状花序」を意味する 'catkin'（HP 1.1.2; 3.7.3）とし、*κατάνθη* は 'catkin'、*κατάνθη* は「*κατάνθη*」と読んで、'cluster'（房）、*κατάνθη* は 'winter bud'（冬芽）と訳した。

「ブリュオン」はアリストテレス『動物誌』（624a34）にも見られ、ミツバチが「ブリュオン」から蜜蝋（*κέρος*）を集めるという。しかし、どの植物の「ブリュオン」であるかは特定されていない⁽⁷⁵⁾。ミツバチが蜜蝋を集める植物とされる植物も（上掲書 627a8-10）、テオプラストスが「ブリュオン」をつける植物としてあげたものではない。テオプラストスは「ブリュオン」に独特な意味を持たせていたと思われる⁽⁷⁶⁾。

「ブリュオン」は動詞「*βρύω*」に由来し、本来は、「ものが溢れんばかりにある」ことを意味する⁽⁷⁷⁾。「ブリュオン」はその派生語の名詞で、植物の名称である。テオプラストスも海藻のアオサ類に言及する時に用いている（HP 4.6.2, 6）。それはディオスコリデスにでてくる「海のブリュ

オン　　」(『薬物誌』4.98)と同一のものとされる⁽⁷⁸⁾。「海の」と形容されたところからすると、本来の「ブリュオン」は陸生のものだったと思われる⁽⁷⁹⁾。陸生の「ブリュオン」にあたる植物は、地衣類のサルオガセ *Usnea barbata* や苔類のゼニゴケ *Marchantia polymorpha* とされる⁽⁸⁰⁾。サルオガセは樹木の枝から垂れ下がる紐状の地衣類で⁽⁸¹⁾、ゼニゴケは地面に張り付いた小さな水盤状の葉状体(雄)と、小さな傘を立てたように見える葉状体(雌)が密生する苔類である⁽⁸²⁾。

そこで、サルオガセやゼニゴケにあたる訳語を探すと、わが国で蘚類、苔類、地衣類などを総称した「こけ」という俗称(通称)にいきあたる⁽⁸³⁾。これは「背の低い植物で、葉と茎の区別がはっきりせず、花が咲かない」(『日本語大辞典』)ものを総称するという。因みに、古代ギリシアやローマの人も地衣類と蘚苔類の区別をしなかったといわれる⁽⁸⁴⁾。とすると、「こけ」はぴったりの名称である。

因みに、「ブリュオン」といわれたものは、オーク類の場合は(HP 3.3.8)、花卉のない雄花が多数集った房[尾状花序]⁽⁸⁵⁾、ゲッケイジュの場合は(HP 3.7.3)小花が密集した花房[散形花序]⁽⁸⁶⁾、トネリコ類の場合も花卉がない小花が密生してつく房[総状花序]である(HP 3.11.4)⁽⁸⁷⁾。これらは花卉が目立たないで小さなものがごちゃごちゃと寄り集まったもので、その様子が、「ブリュオン」(こけ)に似ると思われたのだろう。ところで、セイヨウハシバミは、オーク類と同様、雄花の尾状花序をつけるが⁽⁸⁸⁾、テオプラストスはこれを「ブリュオン」でなく、「綿毛、生え始めの類髯やあごひげ、柔毛」を意味する「イウーロス」*ἰούρος* という名称で呼んでいる(HP 3.3.8; 3.5.5; 3.7.3; 3.15.2)。セイヨウハシバミの雄花は鱗状の小苞が重なり合った房で、「芋虫大の房状のものを一本の柄にいくつもつけ」、「始め鱗のような小苞からなり、球果状だが、冬の間に伸びる」(HP 3.5.5, 6)とテキストに記載される通りである。これには花被がなく、雄しべが八本ずつつく雄花が、細長い軸に密生する⁽⁸⁹⁾。雄しべが柔毛のようにみえたので、「イウーロス」と呼んだのだろう。

つまり、テオプラストスは今日の尾状花序のすべてを「ブリュオン」呼んだわけではなく、花とみたたのでもない(HP 1.1.2)⁽⁹⁰⁾。したがって、ホート訳の‘catkin’同様、花のつき方を示す「尾状『花』序」を「ブリュオン」の訳語として使うのは不適切である。むしろ、本来の意味を生かしたアミグ訳‘le corps mousseux’(こけ状のもの)⁽⁹¹⁾の方が相応しく、いずれも房状のものを指示しているので「こけのような房」と訳すほうが原語の意味にそった訳ではないかと思われる。

このように、部分の名称として用いられた用語を訳す場合、その部分が今日の植物学用語の何にあたるかを突き止めることは必要だが、現代の用語を訳語として安直に用いるのは避けるべきである。原義を生かした訳語によって、著者のいおうとした意味を正しく汲みとることが求められる。

「コックス(実)」と呼ばれた虫こぶ

アカミガシがつける「コックス」*κόκκος* も、現象が正しく理解できなかったために、とりあえず外観が似たものの名称を用いた例である。アカミガシはドングリをつける常緑低木だが、「深紅の『コックス』をつける」という(HP 3.7.3)。じつはここにいる「コックス」はアカミガシの葉にカイガラムシの一種(*Chelmes ilicis* = *Coccus ilicis*)が与えた刺激によって、葉身の一部を含めて、葉の根元にできる真っ赤な丸い形をした虫こぶのことである⁽⁹²⁾。ところが、「コックス」はアカミガシ

がつける4種の果実(カルポス $\kappa\alpha\lambda\upsilon\pi\omicron\varsigma$)の一つとしてでてくる(HP 3.16.1)。4種とは、オーク類の果実(カルポス)である「ドングリ(バラノス)」のような実[堅果]と、オークに寄生するオオバヤドリギとセイヨウヤドリギがつける2種の実[液果]⁽⁹³⁾、および「一種の赤いココス」、この虫こぶである。つまり、これは本物の果実であるドングリとは別だが、木がつくる果実(カルポス)の一種かと困惑して、「『一種の』ココス」と呼んだものらしい。

ココスは、一般的には「果実(カルポス)」に対して、ザクロやケシ、マツの「種子」、コムギの「穀粒」などを意味する。つまり、一般的な「種子」を意味する「スペルマ($\sigma\pi\epsilon\rho\mu\alpha$)」でなく「ココス」を用いたのは「小さい種子で多数集って実るもの」を示唆するためかと思われる。因みにコムギは勿論だが、ザクロ、マツ、ケシなどの種子も、当時よく食べられたものである。したがって、「ココス」は、われわれが日常、ごく俗な言い方で、マツの種子(仁)(ギリシアでは重要な食品)を「マツの実(み)」、ケシの種子を「ケシの実」という言い方に近い語感で用いられているように思われる。したがって、ホートはこれを‘berry’(「液果」、「[ブドウ粒などの]食用の小果実」、「穀粒」の意)と訳し、アミグは‘graine’(「種子」の意)と訳したが、日本語としては、日常語の「実(み)」が相応しいと思われる。なお、ヘロドトスがザクロの赤い種子を「ココス」としているから(『歴史』第4巻143)、「ココス」といえば誰もが赤いザクロの種子を思い浮かべたのかもしれない。そこで、テオプラストスは見かけが赤いアカミガシの虫こぶを見て、木がつくるもので、見かけもザクロの種子のようなものだからというので、「赤くて、まあ、一種の[ザクロの]種子(実)のようなものだ」といったのかもしれない。観察によって通常の果実とは違うことを理解しながらも、虫こぶを示す言葉がなかったので、外形からこう表現したと解される。

「ケンクラミス(イチジクの種子)」と呼ばれた虫こぶ

「イチジクの実」と称されているのは、イチジクの花が多数ついた花軸が肥大した部分[花囊]である。ギリシアの栽培イチジク *Ficus carica* は雌株で、熟させるには野生イチジク(カプリイチジク *Ficus carica* var. *caprificus*)の雄花の花粉をかけなければならない。そこで、古代ギリシア人は野生イチジクに寄生するイチジクコバチを受粉に利用した。イチジクコバチの雌が花囊で成虫になり、野生イチジクの花粉を体につけて飛び出し、栽培イチジクの花囊に飛び込んでくれるように、野生イチジクを風上に植えたり、その枝を栽培イチジクの枝に吊るしたりして、イチジクコバチが栽培イチジクを受粉を助けるように工夫していたのである(HP 2.8.1-3)。この処置をカプリフィケーションという⁽⁹⁴⁾。その花囊が「カルポス $\kappa\alpha\lambda\upsilon\pi\omicron\varsigma$ (「果実）」と呼ばれ、「ケンクラミス $\kappa\epsilon\upsilon\kappa\rho\lambda\mu\iota\varsigma$ 」はイチジクの種子を意味した。

しかし、「イチジクコバチは野生イチジクの実の『ケンクラミス(種子)』から生まれて、そこから[外へ]出ていく。イチジクコバチが[野生イチジクの実から]出て行った後、実の中に『ケンクラミス』がなくなっていて、また、実から出てくる時、脚や羽を残しているのがその証拠だ(HP 2.8.2)」という記述に見られる「ケンクラミス」は受粉して子房に形成される種子でなく、虫こぶのことである。虫こぶというのは、イチジクコバチが野生イチジクの実(花囊)の子房に卵を産みつけると、そ

の刺激で子房が肥大してできるもので、種子のような丸い形をしている。幼虫はそれを食べて成虫となり、飛び出してゆく。テオプラストスはイチジクコバチが花囊から飛び出していくのを観察して、イチジクコバチが生まれたのはこの「イチジクの種子」からだろうと考えたらしい⁽⁹⁵⁾。形が、普通の「ケンクラミス（イチジクの種子）」と同じ丸い形をしているために、虫こぶを種子と勘違いし、「ケンクラミス」と呼んでいる。しかも、イチジクコバチが野生イチジクの花囊から出た後、脚や羽は残っていて、種子がなくなっているからには（HP 2.8.2）、イチジクコバチがそこから生まれたに違いないと考えたのだろう。

ここは、テオプラストスが自然発生を認めていたことを示す点で興味深い箇所である。当時はどこから生まれたのか分からないような小さな昆虫の幼虫である「蛆」や小魚の稚魚などは腐敗物や排泄物から自然に生まれると考えられていた⁽⁹⁶⁾。テオプラストスは植物に関しては自然発生を疑い、すべてが種子から発生すると考えたが⁽⁹⁷⁾、キクイムシの幼虫などは自然に発生すると考えていた（HP 5.4.5）。イチジクコバチも野生イチジクから自然発生すると考え、『植物原因論』ではもっと明確にそうしている⁽⁹⁸⁾。したがって、ここでは「ケンクラミス」はテオプラストスの考えた通り、「種子」でなければならない。

これは、記載された事象をテオプラストスが理解できないまま、観察に間違った推測をまじえて記述した例である。それを正しく伝えるには、その用語が本来持つ意味に忠実な訳語を用いて、著者が理解したままを伝えるようにしなければならないが、これが科学的には何を記述しているのかを註などで知らせることが求められる例だと思われる。

c. 現代に通じる概念にあてる訳語

テオプラストスは、近代以降に証明された理論を予見していたかのように優れた見解をいくつか示している。ただし、その考えは当時の日常語で表現され、本来の意味を敷衍してそれに新しい意味を持たせ、自ら考案した新しい概念を表した。そのような場合は、近代的なものと思われる用語でも、訳語として許されるのではないだろうか。

生態学的な概念としての「トポス」

古代ギリシア人はかなり高度な、いわゆる有機集約農業を行っていた。古くから文明が発達した南東部、特にアテナイ地方では、プラトンが伝えるように、森林が伐り払われると、土壌が流出し、その跡が石灰岩質の、岩だらけのやせた荒地になっていた⁽⁹⁹⁾。その上、成育限界に近いほど降雨量が少なく、著しい乾燥のために作物の収量も低かったと思われる。そのため必然的に多量の堆肥を使った栽培技術が発達し、作物の品種も自然条件に合わせて選抜されていったと考えられる⁽¹⁰⁰⁾。事実、ギリシア人はホメロスの時代から堆肥を作っており⁽¹⁰¹⁾、古典期には、果樹を実生から栽培すると果実が劣化することを知って（HP 2.2.4-6）、優れた栄養繁殖の技術を発展させていた⁽¹⁰²⁾。灌水や剪定方法に加え、挿し木はもちろん、接木では芽接ぎと枝接ぎ、取り木の圧条法と高取り法など、現在の栄養繁殖法のほとんどすべてが実践されていた⁽¹⁰³⁾。テオプラストスはいずれの農業技術を調査し、

学園の庭園では自ら栽培を試み、実験して、植物資源の殖やし方や無駄のない利用法を研究したようである。

ところが、高度な農業技術をもってしても、人力では超えられない壁があることにテオプラストスは気付いていた。彼は植物の成長におよぼす自然環境の影響に目を向けたのである。そのとき、テオプラストスが用いたキーワードが通常は「場所」、「地域」を意味する「トポス」だった。

テオプラストスは植物の生育に関して「耕作や手入れよりも影響が大きいのはトポスである」という(HP 2.2.8)。植物の成長には、土地を耕し、肥料を施し、灌水、剪定などの世話をするより「トポス」の影響の方が大きいというのである。「トポス」の特性によって結実や開花、花の色や香り、芽吹きが遅速、落葉と常緑などが左右されると説いた(HP 1.3.5; 3.3.5; HP 6.6.5; HP 3.4.1; HP 1.9.7; CP 2.7.5)。ただし、種に応じてそれに「適したトポス(オイケイオス・トポス)」があるので、「適したトポス」に植えるべきであり、土地固有の植物が人手をかけなくても立派に自生しているのは、それに「適したトポス」で生育しているからだとして繰り返して述べている(CP 2.2.3; CP 1.16.11; CP 2.7.1, 2; CP 6.18.1)。つまり、植物のそれぞれが、「適したトポスに出会えば、どの樹木も立派に育ち、よく茂る(HP 3.3.2)」と考えたのである。これは、現在の「適地適木」の考え方に通じるものである。

では、「トポス」とは何か。テキストには、「トポス」の違いをもたらす要因は、風通し、地形(山地、くぼ地、谷など)、日当たり、地味(やせ地か肥沃な土地か)、熱の状態(暑さが厳しいか、寒冷か)などだと記されている⁽¹⁰⁴⁾。植物にとって「適したトポス」とは「天候、風、土壌、栄養などによって、外的に植物の成長を助ける」ものだという(CP 1.16.12)。これらは、現代の生物学にいう「環境」を構成する環境因子とされる気候因子や土壌因子を思わせる⁽¹⁰⁵⁾。テオプラストスが、「トポス」の構成要因としている「外的に植物の成長を助けるもの」とは、まさに環境そのものであると理解してよいと思われる。

「トポス」によく似た意味を持つ「コーラー」(「地方、地域、土地」が「トポス」と併記される場合を比べてみると、「トポス」が意味したものがさらによく分かる。例えば、エジプトやキリキアで植物に生じた変化を「コーラー」を変えたせいで起こったことだと記される時(HP 2.2.7, 2.2.10)、「コーラー」は地理的な位置、つまり「地方」を意味している。これに続いて、「トポス」が変わると[暑さ寒さが変り]成長しなくなる植物もある...このような変化は「コーラー」の違いに応じて起こることだ(HP 2.2.10)」と記される。この場合は、「トポス」は暑さ寒さに関わる「生育環境」が、暑い「地方」か、寒い「地方」かという地理的な位置に応じて変るものだということの意味する⁽¹⁰⁶⁾。アミグがいうように⁽¹⁰⁷⁾、「コーラー」はいわば「地理的な位置」を示し、トポスはその場所での生態学的特徴を意味する」と考えるのが妥当である⁽¹⁰⁸⁾。さらに、「トポス」は気候の異なる、遠く離れた地方だけでなく、生態学者のいう微気候や小生息区というべきものをも意味したようである⁽¹⁰⁹⁾。

テオプラストスがこのような生態学的思考にいたったのはギリシアの地形に関係があると思われる。ギリシアの北西部ではピンドス山塊から、東西に何本もの山脈が並び、ペロポネソス半島では南北に

山脈が並んでいる⁽¹¹⁰⁾。その結果、ギリシアの地形は複雑で、距離的に近い所でも、植生が大きく異なる。テオプラストスは生地のレスボス島や生物学を研究したアッソス、その後滞在したマケドニア⁽¹¹¹⁾、マケドニアからアテナイへの旅の途上⁽¹¹²⁾、さらに、また、おそらくアテナイの周辺地方なども旅して、自らその違いを観察したと思われる⁽¹¹³⁾。なお、リュケイオンの調査員が各地にいて、情報を集めたと一般的に言われているが、少なくともリュケイオンで学んだ後出身地に帰った者が、テオプラストスの情報収集に協力したのは確かだろう⁽¹¹⁴⁾。自らの実地観察や調査に加え、そのような情報にも助けられて、ギリシア各地の複雑な植生の違いを知ることができたのだろう。

また、アレクサンドロスの遠征以降、東西交流が進み、未知の地方から固有の珍しい植物の情報や標本がもたらされた⁽¹¹⁵⁾。そのおかげで、テオプラストスは、バナナやワタの存在をヨーロッパへ初めて伝えることができた (HP 4.4.5, 8)。また、例えば、エジプトの果物「ペルセア *Mimusops schimperii*」がロドスでは花が咲くだけで結実しないとか、ナツメヤシがバビロンでは豊富に実をつけるのに、ギリシアでは実がつかないことなどを知った (HP 3.3.5)。エジプトからインドにいたる広い地域からの情報によって、生育環境 (トポス) による植生の違いを知り、地域の固有種を移植して、栽培することの難しさを学んだものと思われる。ちなみにテオプラストスの記述には、自分が経験したことと、伝聞や他人の説との区別が明確になされている。

テオプラストスはそのようにして、自ら多様な植生を観察し、広く集められた情報を駆使して植物を研究した結果、人力を尽くすことより、適した環境に植えたほうが植物はよく育つという考えに行きついたものと思われる。植物にはそれぞれが好む固有の環境 (トポス) があり、自生する木はそれが「本来属すべきトポス」、すなわち「適したトポス」(オイケイオス・トポス) に生育しているのだという (CP 2.7.1; 3.6.7)。固有の樹種が優占する山があるのは地域の固有性のせいだというのも (HP 3.2.6)、植物を取り巻く環境に気づいたからである。最近このような点に注目したヒューズによれば、現代的な意味での「生態学」や「環境」という用語は 19 世紀以降のもたとされるが、環境の概念や生態学の起源は古代ギリシアに遡るべきだという。また、「生物と環境の関係に注目し、初めて生態学というべき研究を始めたのはアリストテレスで、テオプラストスが植物学の分野でそれを継承した」とする⁽¹¹⁶⁾。「テオプラストスが『オイケイオス・トポス』といったのは現代の生態学者のいう『適地』である。ここでいう『オイケイオス』[『家 (オイコス) の、それ自身の、適した』の意。筆者註] は生物と環境の調和の取れた状態を指す。古典の素養があった 19 世紀の科学者がそのような考えの影響を受けて、「生態学 ecology」という言葉をつくったのだ」とヒューズは主張する⁽¹¹⁷⁾。(eco- はギリシア語の「オイコス (oiko- = eco-) の logy [学問]」というわけである。)

ヒューズ同様、アミグも『植物誌』に生態学的な研究姿勢を認め、第 4 巻 は、植物と環境の関係を論じた箇所だとみている⁽¹¹⁸⁾。それ故、所によっては、「トポス」を一般的な意味の「場所 lieu」「地域 region」と訳すが、より生態学的な概念を表しているところでは 'milieu' (「環境」の意) と訳している⁽¹¹⁹⁾。ヴェルレも「トポス」の訳語に 'Standort' (「生活環境、環境」の意) を用いる⁽¹²⁰⁾。どちらも生物学用語として「環境」を意味する用語であり⁽¹²¹⁾、両者はこれが単なる「場所」や「地域」といったもの以上の生態学的な意味を持つ言葉であるという立場をとっている。以上から、テオ

プラストスが生態学的な考え方を明確に持っていたのは確かだと思われる。とすれば、アミグとヴェルレのように、「トポス」の訳語に「環境」という概念をいれた「生育環境」という訳語をあてることに問題はないかと思われる。

分類群の名称 — 高木・低木・小低木・草本

テオプラストスは、植物を四分類群に区分する分類法を考案した (HP 1.3.1)。まず、「幹が一本で大枝、小枝を出し、根が抜けにくいもの」を「デンドロン (δένδρον)」とし、「根から多数の幹が出て、枝が多いもの」を「タムノス (τάμνος)」、 「根元から多数の枝を出すもの」を「プリューガノン (πρηνυγάνον)」、 「根から葉を出し、幹を持たず、茎に種子がつくもの」を「ポアー (πόα)」とした。一般的には、「デンドロン」は「森林や雑木林の樹木」(ヒューレー) に対して「栽培される樹木や果樹」を意味した。「タムノス」は「びっしり茂った藪 (ブッシュ)」や「藪 (ブッシュ) 状の木」、「プリューガノン」は「柴や枯死した木の枝」を意味した。後者は今日の乾燥した荒地の「フリガナ (φρίγανα)」にその名をとどめている⁽¹²²⁾。一方、「ポアー」は「野菜 (ラカノン)」や「雑草 (ボタネー)」に対して「飼料用の草」を意味していた。テオプラストスは、これら日常語を自らの定義した分類群を示す名称として選んだのである⁽¹²³⁾。テオプラストスが形態学的観点から分類したのに対して、今日は、形成層を考慮するなど異なる点もあるが⁽¹²⁴⁾、事実上、生態学ではこの分類法が現在も生きており、図鑑などにも用いられている。したがって、テオプラストスが考案した分類法における分類群であることを示すためにも、「高木」「低木」「小低木」「草本」という名称を訳語として用いるのは不都合ではなく、適切であると思われる。それによって、むしろ、テオプラストスが植物分類学に残した大きな功績を示すことができると思われる。

以上の通り、テオプラストスが現代の概念に極めて近い概念をもっていたと思われる場合は、現代の用語を用いることが許されると思われるのである。

まとめ

『植物誌』は顕微鏡発見以前の最も優れた観察とされるのだから、翻訳に際してはその記載を正確に訳すことが第一義と思われる。そのためには植物に関わる用語に対する訳語の選択に慎重さが求められる。本稿では、専門用語のなかった当時、テオプラストスが用いた用語や概念のいくつかを具体的に取り上げて、古代の科学書の翻訳には訳語の選び方で、テキストが伝える内容、すなわち、当時の科学的水準が変りやすいことを示そうとした。

古典の科学書を訳す際、当時の科学的認識をこえる現代的な概念を持ち込まないことが肝要である。ただし、著者の抱いた概念が現代のものと同等の内容である場合は、多少現代的な用語であっても、それを用いることが許されるかもしれない。

確かに、テオプラストスは哲学者としてはアリストテレスに及ばなかったかもしれないが、植物学の分野では、植物に特有な概念や用語を提案し、より優れた見解を持っていた。アリストテレスが認

めていた植物の自然発生説を否定しており、これはパストゥールが自然発生を否定するより 2000 年余も前のことであった⁽¹²⁵⁾。アリストテレスが植物に雌雄はないと断言し、その考えは 17 世紀にカメラリウスによって花粉の役割が理解されるまで継承された。これに対して、テオプラストスはキュウリの雄花の存在を認めていた。ナツメヤシの雄の木の「埃」[花粉のこと]を雌の木の实 [花のこと] にふりかける処置については、魚の雌が産んだ卵に雄が魚精 [白子] を振り掛ける性行動と同じ意味を持つと認めており (CP 2.9.15)、植物の雌雄の理解に一步近づいていた⁽¹²⁶⁾。また、アリストテレスが植物は動物が食べるためにあり、動物は人間が食べるなど利用するためにある ([政治学] 1256 b 5-21)」という、人間中心の目的論的な考えを説いたのに対して、テオプラストスは植物が実をつけるのは、人間が食べるためではなく、繁殖するためであると認め、目的論の適用に規制を設けるべきだと主張した⁽¹²⁷⁾。また、生態学的な考え方を示していることも卓見の一つである。翻訳にはこれらの意義を正しく伝えることが求められるはずである。

そのため、本稿では植物学的な理解に関して問題となったいくつかを検討した。例えば、植物名の和名表記に注意が必要な場合がある。『ドリユース』の場合のように、ナラ属コナラ亜属に分類される種であるにもかかわらず、ヨーロッパに分布しない「カシ (榿)」(コナラ属カシ亜属) という名称がほとんど定着してしまっている例があるからである。また、語義についても、当時その概念があったか否かを検証しなければならない。例えば、『プリュオン』のように、辞書類でも ‘catkin’ (尾状花序) が定着しているが、テキストでは、『プリュオン』は通常の花とは別のもので、「こけのようなもの [房]」を指す用語として用いられている。雌雄の理解が完全でなかった当時、これが雄花と理解されたわけではなく、また「尾状花序」という概念もなかった。このような場合、著者の理解を超えた概念を示す現代的な用語を訳語として使うのは適切ではないと思われる。

同様に、当時の理解が及ばなかったために、日常語の中から形態の似たものの名称があてられた場合、その日常語の語感を伝える訳語が望ましい。例えば、アカミガシの赤い虫こぶをザクロ、マツ、ケシの種子や穀粒を意味する名称で「コッコス」と呼んでいるが、その訳語はマツの種子を日常語では「マツの実」という表現に似たものだと思う。したがって、「種子」というより「実 (み)」というほうが当時の語感を伝えると考えた。一方、著者の抱いた概念が現代のものと同等の内容を持つために、むしろ現代的な用語が望ましい場合がある。例えば、植物の分類群の名称としての高木、低木、小低木、草本の場合である。これらは、現在も使われ、テオプラストスの考えた分類群と大差ないものとして理解されていた。とすれば、これがテオプラストスの考案になることを伝える意味でもこの用語を使うのが妥当だろう。また、テオプラストスは「場所」を意味する「トボス」を今日の植物生態学の用語である「環境」や「生育環境」に非常に近い概念として用いた。とすれば、「環境」という概念は 19 世紀以降のものとなるが、同様の概念をすでに持っていたのである限り、この訳語を用いることが許されると思われる。翻訳は言葉だけでなく、その背景にある文化を伝えるべきものであり、『植物誌』の学問の水準を伝えるべきと思われるからである。

テオプラストスは裸眼による観察と、自らの体験から、思索をめぐらし、上述のような優れた洞察を行った。当時、余分な情報がなかったために、かえって本質を見通すことができたとも考えられる。

また、専門分化していない時代だったからこそ、理論から応用まで総合的に研究することができたのだろう。テオプラストスの植物研究には、重要な植物資源確保のための研究として、その必要に応える姿勢があるように見える。そのような『植物誌』のなかには、まだ我々が学ぶべきものがあり、それを後世に伝えることも翻訳の意義の一つであると思われる。

註

- (1) 本稿は2008年11月27日、中京大学文化研究所において開催された文化フォーラム「翻訳と文化のさまざまな問題について」での口頭発表の要旨に加筆したものである。
- (2) テオプラストス（前372/1年頃 - 前285年頃）の伝記はディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』賀来彰俊（訳）岩波書店、1994。（以下DLと略す）第5巻に詳しい。『テオプラストス 植物誌』（以下『植物誌』と略す）（解説）464-470参照。底本については、註(6)参照。
- (3) 『植物誌』は前314年頃から書き始めた講義録で、没年まで修正を続けたらしい。雄弁でならしたその講義には、二千人もの聴講生が集ったという（DL 5. 2. 37）。
- (4) 前348/7 - 343/2年の間。このため、アリストテレスは「生物学の祖」といわれる。『動物誌』[Peck, A. *Aristotle History of Animals*. Books . . . Harvard (Loeb), 1965（使用したのは1993年版）、Balme, D.H. *Aristotle History of Animals*. Books . . . Harvard (Loeb), 1991]、『動物部分論』[Peck, A.L. *Aristotle Part of Animals*. Harvard (Loeb), 1937（使用したのは1983年版）]、『動物発生論』[Peck, A.L. *Aristotle Generation of Animals*. Harvard (Loeb), 1942（使用したのは2000年版）]は以下、HA、PA、GAと略す。[]内は使用したテキスト。
- (5) 従来は、テオプラストスは17, 8歳の時にアテナイのアカデメイアに入り、12歳年長のアリストテレスの弟子となつたとされてきた。しかし、アリストテレスが招かれて、小アジアのアッソスに滞在していた時、テオプラストスが生地のレスボス島エレスオスからそこに来て、研究仲間に加わつたという見方が、近年有力になった。Gaiser, K. *Theophrast in Assos zur Entwicklung der Naturwissenschaft zwischen Akademie und Peripatos*. Heidelberg, 1985. 26; Hornblower, S. and Antony Spawforth. eds. *The Oxford Classical Dictionary*. 3rd ed. Oxford, 1996（OCDと略記）, s.v. Theophrastus (by R.W. Sharples). 詳しくは、『植物誌』. 458参照。
- (6) 『植物誌』（原著は *Ἱστορία τῶν ἰσθίων*）と『植物原因論』（原著は *Περὶ αἰτίας*）（それぞれ、HP、CPと略記する）。『植物誌』翻訳の際、底本としたのは Amigues, S. *Théophraste Recherches sur les plantes*. Paris (Budé), 1988; 1989; 1993; 2003; V 2006 (Amigues , , , Vと略記する)。
- (7) Greene, E.L. *Landmarks of Botanical History*. Stanford / California, 1983. 128.
- (8) 『人さまざま』森進一（訳）、岩波文庫、1982；『テオプラストスの形而上学』丸野稔（訳）、創元社、1988.
- (9) Sollenberger, M.G. "Identification of Titles of Botanical Works of Theophrastus." *Theophrastean Studies*. Ed. W.W. Fortenbaugh, et al. Rutgers University Studies in Classical Humanities（以下、このシリーズをRUSCHと略す）. Vol. . New Brunswick/Oxford, 1988（RUSCHと略す）14-24; Amigues, Suzanne. "Problemes de composition et de classification dans l'Historia Plantarum de Théophraste." *Theophrastus - Reappraising the Sources*. Ed. J.M. van Ophuijsen et al. RUSCH . . . 1998. 191-200（RUSCHと略す）の両者の見解に基づく。詳しくは『植物誌』（解説）482-491参照。
- (10) 植物学に関連するものでは、1980年代以降翻訳が相次いでいる。『ディオスコリデスの薬物誌』鷲谷いづみ（訳）、エンタープライズ、1983や、『プリニウスの博物誌』中野定雄ほか（訳）、雄山閣、1986；『テオプラストス 植物誌』大槻真一郎、月川和雄（共訳）、八坂書房、1988；『プリニウス博物誌』大槻真一郎（編）、八坂書房、1994に加え、テオプラストスの引用、借用が多い『アテナイオス 食卓の賢人たち』柳沼重剛（訳）、京都大学学術出版会（西洋古典叢書）、1997 - 2002などである。

- (11) 『アリストテレス全集』 島崎三郎 (訳), 第7巻『動物誌 上』; 第8巻『動物誌 下』・『動物部分論』; 第9巻, 『動物運動論』・『動物進行論』・『動物発生論』 岩波書店, 1968 - 1969.
- (12) 島崎三郎 『アリストテレス全集 7』 (1968年6月) 月報 2 : 8.
- (13) 『動物部分論』・『動物運動論』・『動物進行論』 坂下浩司 (訳), 京都大学学術出版会 (西洋古典叢書), 2005.
- (14) 大槻真一郎・月川和雄 (訳), 前掲書, 註(10)参照.
- (15) Wimmer, Friedrich. *Theophrasti Eresii Opera Quae Supersunt Omnia*. Breslau, 1842; Leipzig (Teubner), 1856; Paris (Didot), 1866.
- (16) Hort, Arthur. *Theophrastus Enquiry into Plants*. Vols. - . Harvard (Loeb), 1916. (Hort , と略す)
- (17) Einarson, Benedict and G.K.K. Link. *Theophrastus De causis plantarum*. Vol. . Harvard (Loeb), 1976. (Books - (); Books - (), 1990)
- (18) 『植物誌』が『動物誌』に対応して書かれたように、『植物原因論』は『動物発生論』に対応して書かれている。収集した事実の研究(『植物誌』)の後には、その原因の研究(『植物原因論』)が続くというアリストテレス流の研究姿勢を暗示する記述がないわけではないが(HP 1.3.6)、『植物原因論』は、植物に関する事象の原因ではなく、植物の発生・繁殖の問題を扱っている、と Gotthelf はいう。『植物誌』には繁殖の問題にたいする関心の高さからこういえるという (Gotthelf, Allen. "Historiae I; plantarum et animalium". RUSCH . 100-135, esp. 121-125, 122-123; Desautels, Jacques. "La Classification des végétaux dans la recherche sur les plantes de Théophraste d'Érésos". *Phoenix* 42 (1988): 219-244, 223).
- (19) 『植物誌』に関係が深い古典の校訂・訳註本については『植物誌』. 553-556 参照.
- (20) André, Jacques. *Les noms de plantes dans la Rome antique*. Paris, 1985. (以下、Noms と略す)
- (21) Gaiser, K. op. cit.; Whörle, Georg. *Theophrasts Methode in seinen Botanischen Schriften*. Amsterdam, 1985.
- (22) Fortenbaugh, W.W. et al. eds. and trs. *Theophrastus of Eresus - Sources for his Life, Writings, Thought and Influence*. Part , . Leiden / New York / Köln, 1992; Sharples, R.W. *Theophrastus of Eresus Commentary Volume 5 Sources on Biology*. Leiden / New York / Köln, 1995. (『植物誌』. 553 参照)
- (23) Fortenbaugh, W.W. et al. eds. *Theophrastus of Eresus*. RUSCH Vol. , New Brunswick / Oxford, 1985 (RUSCH と略す); RUSCH ; Fortenbaugh, W.W. et al. eds. *Theophrastus*. RUSCH Vol. . New Brunswick / London, 1992 (RUSCH と略す); RUSCH .
- (24) Amigues - ; Amigues, S. *Étude de Botanique Antique*. Paris, 2002.
- (25) 例えば、ピュデ版第三巻公刊後に発表された研究 Blanc, Alain. Les de Théophraste: Carrier, bûrons ou muletiers? *Revue de Philologie* 70-2 (1996): 199-210 は、' (HP 3.3.5, 3.12.4 al.) を「きこり」とする通説に疑問を呈した。従来は、' - を「山」 σ と' ('打ち叩く、刺す')の意)の合成語と見て、「きこり」か「石工」とみなされてきた (Hort = LSJ, Bailly, DELG)。これに対して、Blanc は、' - (' σ -ラバ)と' (' σ を「口バを [筈] 打つ」という意味に用いるホメロス『イリアス』松平千秋 (訳), 岩波書店, 1992. 第11歌 558-561と同じ用法)の合成語で「ラバを [筈] 打つ人」と解すべきとした。ラバが古くから材木運搬に使われたことを考慮すると (上掲書, 第17歌 742-744, 第23歌 114-121)、' は「材木運搬業者」を意味し、材木を運ぶついでに、きこりから集めた情報をテオプラストス、あるいはペリパトス派の人に伝える役目をした人々なのだという主張で、説得的である。テオプラストスが用いた情報源がどのようなものだったかはテキストの記載を解釈する上で、重要な意味をもつ。この論文は、テキストの用語を語源的に再考することによって、山地の植物に関する情報源について、従來說に変更を迫った例として注目すべきものと思われる。
- (26) Einarson, Benedict. "The Manuscripts of Theophrastus' *Historia Plantarum*". *Classical Philology* 71 (1976): 67-76. 写本については『植物誌』. (解説) 464-482 参照。

- 27) U写本が9世紀から10世紀の間に特徴的なウンキア書体で書かれていることから、その作成年をさかのぼらせた説。また、アミグはU写本のほかに、バリ国立図書館やラウレンツィアナ図書館の写本、バイエルン州立図書館の要約と抄録、および15世紀のガザによるラテン訳(1483)などを重視した。
- 28) Schneider, J.G. *Theophrasti Eresii Quae Supersunt et Excerpta Liberatorum Quatuor Tomis Comprehensa*. 5Bde. Leipzig, 1818-21.
- 29) 前註(5)参照。ヴィンマーはU写本の第10巻と、第9巻の後半に見られる内容の重複を整理して1巻にまとめ、9巻本とした。
- 30) 前註(6)参照。
- 31) 例えば、「イチゴノキの花の一つ一つは細長いギンバイカのものに似ていて大きさも同じである。」(HP 3.16.4)という箇所。ホートは「ギンバイカのもの」を「ギンバイカの花」と解し、「花」を補った。ところが、イチゴノキの花の形は壺形だから、ギンバイカの五片の白い花ではなく、細長い壺形をした果実に似ている。つまり、補うべきは「実」である。
- 32) Raven, J.E. *Plant and Plant Lore in Ancient Greece*. Oxford, 2000. 5-9; Amigues I.L. 詳しくは同定の箇所で触れる。
- 33) 前註(6)参照。
- 34) アミグに対する評価については、『植物誌』(解説) 480 註(1), (2)参照。
- 35) 古代の気候については資料が乏しいため、不明確だったが、花粉学や年輪年代学のおかげで明確な手がかりが得られるようになった。花粉学によって特定の気候への適性が判明した植物に照らして、古典文献に見られる植物を検証し、それらの古代における分布を調べることができる。その結果、前300年頃の平均気温は現代の数値の範囲内とされた。また、年輪年代学によっても古典期のギリシアにおける年による気候変動の様式は現代の様式に極めて近いと認められている (Sallares, Robert. *Ecology of the Ancient Greek World*. Ithaca / New York, 1991. 390-396, esp. 391)。
- 36) 紀元2世紀のパウサニ阿斯『ギリシア記』飯尾都人(訳)、龍溪書房、1991が伝える「碇や魚網も浮漂をつくる材料となる(8.12.1)」植物は確かにコルクガシとみなされるが、現在のギリシアには自生しない。『植物誌』413, 註(5)参照。
- 37) 例えば、現在のギリシアで一般的に栽培されるピスタチオは古代にはシリアの特産物で、ギリシアでは栽培されていなかった(HP 3.15.3)。また、柑橘類では古典時代から栽培されたのはシトロン *Citrus medica* のみで、レモン *Citrus limon* は11-12世紀、現在日常的にジャムを作るネランツィ *Citrus aurantium* はさらに後に導入された (Zohary, Daniel and Maria Hopf. *Domestication of Plants in the Old World*. Oxford, 1988. 160; Meikle, R.D. *Flora of Cyprus*. Vol. - . London et al. 1977-1985. 350; 星川清近『栽培植物の起源』二宮書店、1987. 224)。
- 38) Raven, J.E. op. cit. 13-20, esp. 20.
- 39) Amigues . L.
- 40) 例えば、Sharples, R.W. *Class. Rev.* 39-2. (1989): 197-198; Hertzshoff, Bernhard. *Gnomon* 63-4 (1991): 293-300; Gottschalk, H.B. *Mnemosyne* 52-2 (1999): 218-221 だが、アミグの校訂本への書評において、それぞれ「決定的な校訂本、註釈本となるだろう(S)」、「テキストの解釈と植物の同定に関して、決定的前進(H)」、「校訂と植物の同定とは将来のすべての研究において、アミグ版が出発点になるだろう(G)」など評している。
- 41) Andrewes. *The Greeks*. New York / London, 1967. 1-13; 岩片磯雄『ギリシアの農業と経済』大明堂、1988. 8-16.
- 42) ストバート『ギリシア』(拙訳)、国土社、1994. 11-12; 岩片磯雄 前掲書 10.
- 43) テレピンノキ *Pistacia terebinthus* は東南ヨーロッパ、北アフリカ、ギリシア、ロシア、トルコ原産、アカミガシ *Quercus coccifera* はギリシア周辺、フランス、イタリアからイベリア半島に分布する種。Cf. Humphries, C.J., J.R. Press and D.A. Sutton. *The Hamlyn Guide to Trees of Britain and Europe*. London / New York / Sydney / Toronto, 1981. 228, 128 (Trees Ham. と略す)。

- (44) キューガーデンのキュプロスの植物誌である Meikle, R.D. *Flora of Cyprus*. London et al. Vol. 1. 1977; Vol. 2. 1985. *Flora Cypr.*と略す。)の詳細な記載は、テキストの記載の細部を確認するためにきわめて有用である。また、地中海沿岸地方を有するフランス、イタリアの図鑑も同様である。『植物誌』. 574 参照。
- (45) 『植物誌』. 572-578 の参考文献 (特に、572-573 のギリシアで出版された図鑑) 参照。Sfikas, George. *Self-propagating Trees and Shrubs of Greece*. (Sfikas Trees と略記) Thessaloniki / Athens, 1978; Strid, Arne. *Wild Flowers of Mount Olympus*. Athens, 1980 (Strid と略記) などに加えて、2007 年ギリシアで入手した 5 冊のうち 4 冊までが 2006 年刊行であることから、図鑑類の出版が盛んになったのが最近だとわかる (拙稿「古代ギリシアの植物を訪ねて」古代世界研究会『かいほう』. 98 (2008) : 1)。
- (46) この種はアルバニア、クレタ、ギリシア、ルーマニア、トルコに分布する。葉に鋸歯がなく、イチゴノキより実は小さく、丈が高い (Trees Ham. 282)。
- (47) 文学の分野では、少数を除いて訳語として「榿の木」が定着している。原語表記をしたのは、『テオプラストス 植物誌』大槻真一郎・月川和雄 (訳), 八坂書房, 1988 の一部 (「ドリュス」)、および『プリニウス博物誌』の八坂書房版 (ラテン語の原音で「ロブル」)。
- (48) 以下、『植物誌』. (解説)544-548 に述べたものを抄録し、加筆した。
- (49) 総称としての「ペウケー」はマツ属の諸種、「メリアー」はトネリコ属の諸種、「スペンダムノス」はカエデ属の諸種という具合である。ただし、これらが文脈から明らかに一種を指している場合には種名で表記できる。例えば、「ペウケー」がアレッポマツと併記される場合、「ペウケー」は明らかにマツ類全体でなく、ニグラマツを指す。「ドリュス」の場合も、テオプラストスだけでなく、碑文 (例えば、前 4 世紀の神殿に相当な量の「ドリュス」の材が使われた場合) でも、その種類は区別されていない (Meiggs, Russell. *Trees and Timber in the Ancient Mediterranean World*. Oxford, 1982. 46, 443, 445 参照)。
- (50) 「常緑で殻斗の鱗片が瓦重ね状に並びコナラ属の植物はかなり多様な群を含んでおり、どのように分類するかは今後の課題」とされる (朝日百科『植物の世界』朝日新聞社, 1994-1997. 第 8 巻 79. 以下、『植物の世界』と略す)。例えば、従来、コナラ属は 2 亜属に分類され、クヌギやアベマキは日本のコナラ属コナラ亜属に分類された (日本林業技術協会『林業百科大事典』丸善, 1975. 701-702. 以下、『林業百科』と略す)。しかし、近年、「クヌギ、アベマキの類はアカナラ亜属に属すると考えたほうがよいだろう」(『植物の世界』第 8 巻 76) と記されているように、コナラ属の分類は専門家間でも問題があるらしい。本稿では「カシ」か「ナラ」かを問題にするので、コナラ亜属の分類の詳細には立ち入らない。
- (51) 『林業百科』. 701, 86 ; 『植物の世界』. 第 13 巻 151 参照。
- (52) 加藤憲市『植物民俗誌』富山房, 1976. 408 ; 『植物の世界』. 第 8 巻 71 参照。
- (53) HP 3.16.1-3 で「ドリュス」と呼ばれているのは明らかに落葉性コナラ属の諸種である。
- (54) 例えば、「野生のドリュス σ 」にあたる *Quercus aegilops* や「広葉のドリュス σ 」にあたる *Quercus frainetto* は落葉性である。また、「栽培されるドリュス σ 」にあたり、没食子を作るので知られる *Quercus infectoria* は新芽が出る直前に落葉する半落葉である (Flora Cypr. 1479; Sfikas Trees. 150)。
- (55) Sfikas Trees. 146.
- (56) Sfikas Trees. 154-155; Trees Ham. 128-129.
- (57) Sfikas Trees. 148-149, 150-151, 152-153.
- (58) 『植物の世界』. 第 13 巻 155-157.
- (59) Sfikas Trees. 154.
- (60) コルクガシ、アカミガシ、セイヨウヒイラギカシなどがコナラ亜属 (Subgen. *Quercus*) に属することについては、Anthony Julian Huxley et al. eds. *The New Royal Horticultural Society Dictionary of Gardening*. London/New York (MacMillan/Stockton), 1992, s.v. *Quercus*, 776-789, esp. 779 参照。
- (61) Amigues . 182-183.
- (62) ウバメガシが「カシ類」に (室井緯監修『図解 生物観察事典』地人書館, 1993.74)、コルクガシが「カシ (*Cyclobalanopsis*) 属 (以前の分類で、アカガシ (*Cyclobalanopsis*) 亜属のこと)」に分類されている

- (『林業百科』「コルクガシ」の項)。
- 63) ウィリアム・ブライアント・ローガン『ドングリと文明』山下篤子(訳), 日経 BP, 2008. 4 参照。また、テオプラストスを資料としてギリシアの自然の荒廃について論じた藤縄謙三論文も、「ドリュース」を「オーク」と記した(『ギリシア文化の創造者たち』筑摩書房, 1985. [第 4 章「自然の荒廃の問題」] 213-252 での言及)。
- 64) 堀田満他編『世界有用植物事典』平凡社, 1989. 767; 上原敬二『樹木大図説』有明書房, 1959. 1087 参照。
- 65) この英名を用いるのは、Page, S. and Margaret Olds, eds. *Botanica*. New York, 1997. 633; *Trees Ham.* 250; *Strid.* 277; *Sfikas Trees.* 158 など。和名をキリストノイバラとするのはモルデンケ『聖書の植物』奥本裕昭(編訳), 八坂書房, 1995. 41、トゲハマナツメとするのは中島路可『聖書の植物物語』ミルトス, 2000. 43。
- 66) モルデンケ 前掲書. 40-41.
- 67) モルデンケ 上掲書. 41 は *Paliurus spina-christi* を、中島路可前掲書. 43 は *Zizyphus spina-christi* をキリストノイバラと呼ぶ。
- 68) 『植物の世界』. 第 4 巻 34 は和名を記さない。
- 69) Gotthelf, Allen. op. cit. 100-135, esp. 115-119.
- 70) HA 486a16-b21; PA 644b1, 644a17ff., 692b3-693b13 など。『植物誌』. 29 註(9), (解説) 507-514 参照。
- 71) 『植物誌』. (解説) 503-507 参照。
- 72) 類と類の間では部分が対応し、同一の類の間では部分は等しいが、過不足があることによって異なるトアリストテレスはいつているが (HA 486a15-487a2)、この区別が厳密になされたわけではないともいわれる (Balme, D.M. " σ and τ in Aristotle's Biology". *The Classical Quarterly* 12 (1962): 81-98, esp. 84-85)。テオプラストスは植物の「ゲノス」の中に「高木・低木・小低木・草本」の「エイドス」が含まれ、高木にはマツ類などの「ゲノス」があるという具合に、「ゲノス」と「エイドス」はつぎつぎと区分される下位の分類群をさす言葉として使った。セイヨウキツタでの分類での用法 (HP 3.18.6-8) が最も典型的である。しかし、その用法が厳格に用いられたわけではない (Deasutels, J. op. cit. 227-238)。
- 73) 「イコール」にリンパ液を含めたとみる『動物部分論』(PA 647 b 10-17) への島崎氏の註(1)、および、『岩波生物学辞典』。「循環系」、「脈系」の項参照。
- 74) Greene, Edward. L. *Landmarks of Botanical History*. Stanford / California, 1983. 170-171. 辞書によれば、「メートラー」を植物の髓とみなす用例はテオプラストス以前にはない。
- 75) この「プリュオン」は Balme, D.M. *Aristotle History of Animals*. Books - . Harvard. (Loeb), 1991. 341 の訳語 'the blossoms' 同様、「あふれんばかりに咲いている花」を意味しているように思われる。
- 76) テオプラストス以前に「尾状花序」の意味で用いられた例は知られない。
- 77) 例えば、「白い花があふれんばかりに咲いている σ τ ρ ω σ τ ρ ω σ 」(ホメロス『イリアス』第 17 歌 56)、「蜂蜜やヒツジなどがうなるほどあった生活 σ τ ρ ω σ τ ρ ω σ 」(アリストパネス『雲』45) [原典は Rogers, B.B. *Aristophanes The Clouds*, Harvard (Loeb), 1960]、「万事に叶う権勢におごった [すべての戦いにも十分に備えある] もの μ μ ω σ τ ρ ω σ 」(アISKYPOC 『アガ멤ノン』169) [原典は Smyth, W. *Aeschylus Agamemnon*, Harvard (Loeb), 1926]、「ミルト(ギンバイカ)の実もさわる輪飾 μ μ ω σ τ ρ ω σ 」(アリストパネス『蛙』329) [原典は Rogers, B.B. *Aristophanes The Frogs*. Harvard (Loeb), 1961] などの例に見られる。
- 78) アオサ属の *Ulva lactuca*、ポウアオノリ *Enteromorpha intestinalis*、ウスバアオノリ *E. linza* などアオサ類の緑藻にあたる (Amigues . 242, n. 12; Noms. s.v. bryon; 『植物の世界』. 第 12 巻 214-215 参照)。
- 79) Amigues . 242, n. 12.
- 80) LSJ; Noms. 39. s.v. 'bryon'
- 81) 『植物の世界』. 第 12 巻 168.
- 82) 上掲書. 第 12 巻 141.

- 83) 各種の国語辞典に、「コケ(苔・蘚・蘚)」は「コケ植物に属する蘚類・苔類、地衣類、[およびそれらに似た羊歯植物(クラマゴケの種類)]の通称[俗称]という(尚学図書編『国語大辞典』小学館、1982; 梅棹忠夫他監修『日本語大辞典』講談社、1991; 新村出編『広辞苑』岩波書店、1963。「こけ」の項)とされる。
- 84) Noms. 144. s.v. 'lichen.' なお lichen はギリシア語「レイケーン」から転写した語で、テオプラストス (CP 5.9.1) も類語を用いている。
- 85) Flora Cypr. 1421.
- 86) Ibid. 1092.
- 87) 『植物誌』では原語「メリアー」がマンナトネリコ *Fraxinus ornus* と *F. angustifolia* [セイヨウトネリコの類] を指す。HP 3.11.4 では「花も実もない」種類が「ブリュオン」をつけるという。マンナトネリコは白い花弁のある小花の美しい円錐花序(上部は総状)をつけるので、ここでイダ山地方の人が伝えた「メリアー」は花弁がない小花の房の総状花序をつくる後者のことらしい (Flora Cypr. 1421 and 1092; Trees Ham. 286 and 288; Amigues II. 161, n. 17 参照)。
- 88) Trees Ham. 120; 『植物の世界』第8巻84。
- 89) Flora Cypr. 1476。「イウーロス」については、『植物誌』. 288 註(1)参照。
- 90) セイヨウハシバミやオーク類の雄花序については、当時は花と思う人と、花と思わない人がいたという (HP 3.3.8)。テオプラストスも花や実と「ブリュオン」を併記しているので、花とはみなかつたらしい。
- 91) Amigues I. 2 and 69, n. 3.
- 92) Amigues II. 139, n. 9; 『植物誌』. 317 註(5), 411 註(5)参照。
- 93) オオバヤドリギは南欧では、すべてのコナラ属やクリなどに半寄生し、黄色い液果を総状につける、落葉性の寄生植物。セイヨウヤドリギは、通常リンゴやセイヨウナシ、などバラ科の植物やモミ、マツに半寄生する。ヨーロッパナラ(オーク)にはめったに寄生しないので、ドルイド僧がオークに寄生した場合だけこのヤドリギを神聖視したとプリニウスが伝えている(『博物誌』第16巻249-251)。これは、常緑性の低木で、白い液果をつける。テオプラストスは『植物原因論』で、この2種が別の宿主につく(モミやマツにつくものと、オーク、テレピンノキなどにつくもの)という考えを示すが、この2種が同じ種類の木につくとか、同じ個体に一緒につくとみる説も紹介している (CP 2.17.1-2)。ただし、実際にはアカミガシが2種の実をつけるのは、アカミガシにオオバヤドリギが付き、それにセイヨウヤドリギが寄生する場合だけだという (Amigues . 181)。
- 94) 野生イチジクの花囊に入った雌のコパチは、雌花の子房に卵を産みつける。その刺激でできた虫こぶを食べて幼虫が成虫になると、虫こぶから出て交尾し、羽のない雄は死に、雌は花囊から飛び出す。ところが間違えて栽培イチジクに入った雌は産卵できない。産卵管が栽培イチジクの花柱より短く、子房に届かないからである。産卵できる花を探して飛び回らううちに花粉を撒き散らし、その結果、栽培イチジクが受粉して、花囊が大きく熟すことになる (Amigues I. 136, n. 1, 137, n. 2, n. 3; 『植物誌』. 252 註(1), (3), (4), 255 註(4), (5)参照)。
- 95) イチジクコパチが実[花囊]から飛び出すときに残した脚や羽を見つけ、また、「種子」(じつは虫こぶ)が空になっているのを観察したからである。
- 96) 自然発生説については、『植物誌』. (解説) 526-530 参照。
- 97) 自然発生説は、1862年、パストゥールが、腐敗や発酵が微生物の作用によることを実験的に証明して、否定するまで生きながらえた。その2000年以上も前に、植物の自然発生に疑いを抱き、植物はすべて種子から生じると主張した (HP 5.2.5) のはテオプラストスの驚くべき先見性を示している。
- 98) 『植物原因論』(2.9.6) では「野生イチジクは、他の腐敗物がそうであるように、動物[ここでは、イチジクコパチ。筆者]を生み出す性質を持っている」という。つまり、腐敗物が他の動物を自然発生させるように、野生イチジクはイチジクコパチを自然発生させるといっている。
- 99) プラトン『クリティアス』111a-d. 田中美知太郎(訳)、中央公論社、1969、412-413; 藤縄謙三 前掲書。213-252. 特に、214, 236-246 参照。

- (00) 岩片磯雄 前掲書 4-8.
- (01) 「広大な王領の畑に施すようにと、門戸の前に堆く積まれた、騾馬や牛の糞の山」というホメロスの一節から知られる（『オデュッセイア』松平千秋（訳）、岩波書店、1994. 第17歌 297-9）.
- (02) 果樹などの栽培法については、『植物誌』第2巻の全てをあてている。
- (03) 特に、HP 2.1.1-4, 2.5.3.
- (04) 「トポス」には「木陰で風がなく湿った状況」と「日当たりがよく、嵐や風にさらされ、土壌がやせて乾いた状況」があり（HP 2.8.1）、また、「寒く雪が降るトポス」（HP 1.3.6）；「土壌の湿り具合」（HP 1.7.3）；「風通しのよし悪し」（CP 2.3.3, 2.7.5, 5.12.7）；「風が当たらず、日が差さない窪地か山か」（HP 4.1.2）などの違いがあるという。このように植物の生育が生育地の諸条件に影響を受けるという見方が生態学的だとして、テオプラストスが最近注目されており、「生態学の祖」と呼ぶ人もいる（Hughes, J. Donald. "Theophrastus as Ecologist". RUSCH . 1988. 67-75, esp. 74）.
- (05) 『岩波生物学辞典』, 「環境」の項参照。「環境」は、また、無機的環境（気候および土壌因子）と有機的環境（生物的環境）とに分類されることもあるという。テオプラストスは主に前者を想定しているように思われる。
- (06) 「地理的な地方・地域」という意味での「コーラー」が、ある植物に適している場合には植物がよく育つということをもテオプラストスは繰り返して述べている（HP 2.4.1, 2.5.7; CP 1.9.3）。それは、HP 2.2.10 で言ったように、「環境（トポス）」は、「地方（コーラー）」が変るのに応じて変るものだから、地理的にその植物に適した地方には、その植物の生育に適した環境があるということの意味している。
- (07) Amigues I. 128, n. 5
- (08) 「コーラー」と「トポス」を併記して、落葉しないのは「コーラー」と「湿ったトポス」のせいだと記される場合（HP 1.9.7）、「コーラー」は「[ある気候が支配する] 地方」、「トポス」は「土壌が湿っている生育環境」と解される。
- (09) Hughes, J. Donald. op. cit. 70.
- (10) Andrewes, Antony. op. cit. 1-6.
- (11) アリストテレスがアレクサンドロスの家庭教師を勤めていた2年間（前343頃）はテオプラストスの所在が確かではないが、当時30歳くらいだったテオプラストスは、13, 4歳だったアレクサンドロスの学友としては年長でありすぎ、また、マケドニア王が家庭教師の同行者まで面倒を見たとは思えないから、おそらく同行しなかったのだろう（Maxwell-Stuart, P.G. "Theophrastus The traveler." *La Parola del Passato*. 51-4 (1996): 241-262, esp. 241 による）。しかし、マケドニアのスタゲイラに土地を買ったのだから（DL 5.2.52）、そこに滞在したことは確かだ（Amigues . XI）、この2年間、テオプラストスはマケドニア東部へ探査に出かけたとも考えられる。（Cf. Maxwell-Stuart, P.G. op. cit. (1996): 241-262）。一方、Capelle, W. "Theophrast in Ägypten?" *Wiener Studien* 69 (1956): 173-186 が、かつて主張したように、テオプラストスがエジプトへ調査旅行に行ったとすれば、可能性があるのはこの時期しかないともアミグはいう（Amigues . XIII）。ただし、エジプト旅行という大事件をディオゲネス・ラエルティオスが記さなかったのは奇妙である。エジプトには行かず、マケドニア東部の探査をしていたとみた方が自然だろう。
- (12) テオプラストスがマケドニア東部からポントス地方、カルキディケ地方へも自ら赴き、アリストテレスとともにアテナイに向かう途中、各地を直接訪れたと Maxwell-Stuart は主張する。また、『植物誌』に記載される地名に基づいて、マケドニアからアテナイへ向かった際のルートを明らかにしようと試み、オリュンポス山、ラリサ、パガサイ、パルナッソス山、プラタイアからピレウスへの道を辿ったとする（Maxwell-Stuart. op. cit. (1996): 241-262）。
- (13) Amigues . XI-XII. また、テオプラストスがオリュンピア競技に出かけた可能性があり、それは前304年だろうと推測され、その往復の途上、ペロポネソスの各地（ラコニアは除く）で植物研究をしたことが記述の正確さからわかると Maxwell-Stuart は主張する（"Theophrastus and the Peloponnesians." *La Parola del Passato* 53-21 (1998): 81-114）。さらに、アリストテレスが隠棲したのは妻の出身地のカルキスだったから、そこに妻と娘が残されていたとすれば、遺言によって、アリストテレスの娘を託されていたテオ

- ラストスは (DL 5.1.12-13)、結婚を取り計らうために、エウボイア島へ行ったはずであり、それは前 321 後半から 320 年だったとも推測している (Maxwell-Stuart. "Theophrastus's Knowledge of Euboea." *Maia* 51-1 (1999): 86-96)。このように、テオプラストスの植物研究の行動範囲は従来考えられてきた範囲より、かなり広くみる主張がなされるようになった。確かにその可能性は否定できないので、今後の課題としたい。
- (114) Maxwell-Stuart, P.G. "Theophrastus The Traveler." *La Parola del Passato*, 51-4 (1996): 266.
- (115) アレクサンドロスの遠征に随行した軍人や学者、その後の移住者や商人などからもたらされた情報を利用できた (Amigues . XI- ; Frazer, P.M. "The World of Theophrastus." *Greek Historiography*. Ed Hornblower, S. Oxford, 1994. 173-181.
- (116) Hughes, J. Donald. op. cit. 67. アリストテレスが水生動物、陸生動物と分類したように、テオプラストスも植物を陸生と水生に分類した。高木、低木、小低木、草本に区分することを主要な分類としたが、「陸生植物と水生植物に区分する分類がある意味では最も重要だ」といい、それは植物が動物と違って土地に縛りつけられているからだという (HP 1.4.1-4, 1.14.3)。グリーンの言う通り、彼が生態学的な分類の重要性を認めているのは明らかである (Greene, Edward L. op. cit. 195-8)。
- (117) Hughes, J. Donald. op. cit. 67, 74, n. 1.
- (118) 第 4 巻では、固有な生活環境の中で、最も重要な位置を占める水の環境と植物の関係をテーマとして、生態学的な考察がなされているとアミグも認めている (Amigues . XII- XIII)。
- (119) ホートが「トボス」にあてた訳語の中で、'habitat' には、「生育地」「自生地」「生育環境」「環境」「立地」「原生地」など意味があるが (林学会編『林業検索用語集』林学会、1990；文部省『学術用語集 - 農学編』日本学術振興会、1986；園芸学会編『園芸学用語集』養賢堂、1977)、テオプラストスが「環境」を意識して「トボス」を用いた箇所では、訳語としては「生育地」よりも、「環境」や「生育環境」の方が適確と思われる場合がある。一方、アイナソンの用いた訳語の 'locality' (地域性) 'location' (立地) (文部省『学術用語集 - 農学編』日本学術振興会、1986)、'circumstance' (状況、環境) などにも、生態学的な意味が含まれる。
- (120) 「オイケイオス・トボス (CP 1.22.3)」を Wöhrle は 'der eigene Lebensraum' ('固有の生活環境') の意と訳す (Wöhrle, Georg. op. cit. 158)。
- (121) 山田常夫他編『岩波生物学辞典』岩波書店、1960。「環境」の項。
- (122) ギリシアでは、放牧や火事の後に生じる、低木 (アカミガシなど) の密生林をマキと呼び、さらに過度な放牧や火事によって生じた荒地で、丈が低く、刺の多い低木や草本が地面を覆っている所を「フリガナ」と呼ぶ ('植物の世界'. 第 13 巻 154-157)。
- (123) Greene, Edward. op. cit. 177-181; Wöhrle, Georg. op. cit. 112-123. 分類群の名称に関する考察の詳細は『植物誌』. 36 註(1) - 註(4)、および 38 註(1)参照。
- (124) 『植物誌』. (解説) 514-515 参照。
- (125) 自然発生説については『植物誌』. (解説) 526-530 参照。
- (126) 植物の性については『植物誌』. (解説) 530-537 参照。
- (127) 目的論については『植物誌』. (解説) 522-526 参照。